

2020年に油をかぶって焼け死んだトンカツ屋の店主のことを覚えていますでしょうか。死の3日前、店主は経営の不安を口にしていました。コロナの影響によって先行きに絶望して自殺をしたらしいと報道されていました。私の店もトンカツ屋と同じく客商売なので、命を絶つほどの絶望を抱いた店主に少なからぬ共感を覚えました。その頃は新型コロナをどう封じ込めるかという時期で、緊急事態宣言によって経済は強制的に止められていました。当時の首相は、国ができる限りの支援をするから国民の皆さんは頑張って耐えてくださいと言いました。そんな状況のなかで性風俗事業者だけが支援から除外されました。国民の理解を得られにくいからと説明がなされました。

私は絶望と共に恐ろしさも感じていました。感染者の家に石が投げ込まれたり、他府県ナンバーの車が傷付けられたりする事件を目にしたからです。海外ではアジア人を狙った暴力事件が起きました。次の標的は自分たち性風俗かもしれないと思いました。案の定、夜の街バッシングが起り、性風俗はコロナ感染拡大の原因ではないと言われるようになりました。自分の周りで何が起こってもおかしくない状況でした。世界が不安と恐怖で満ちてゆくを見ながら、パンデミックに直面した社会の脆さを感じました。

過去に日本でエイズパニックが起こったときには、感染者の個人情報晒され根拠のないデマが広がりました。関東大震災の際には朝鮮人が虐殺されました。災害時やパンデミックの際に民衆が、特定の対象を攻撃して不安と恐怖の捌け口にするのは、歴史上何度も繰り返されています。パニック状態に陥った民衆が標的にするのは、自分とは違う者に対してです。国が災害時に、特定の人々に対して、理解を得られないからと名指しで支援から排除することがどんな意味を持つのか。どんな恐怖を与えるのか。その影響を考えないことは、歴史から何も学ばず、人権を軽視しています。国は、国民の理解という言葉を使い、政策によって差別を生み出し、差別を推進したのです。

私は18歳からずっと性風俗を生業としてきました。おそらく皆さんと同じように仕事が日常の大部分を占めています。性風俗と関わりがない人にとってはイメージしにくい仕事かもしれませんが。しかし経済規模や従事する人の数を思えば小さな産業では全くありません。それによって生計を立て暮らしている人が大勢います。性風俗店もラブホテルもアダルトグッズ店も、働いている人や利用者のごく普通の人々です。経営者である私もごく普通の人間です。犯罪者でもなければ道を踏み外した人間でもありません。ごく普通に、懸命に生きています。私にとってはこの仕事が、自分の存在を形づくり、この仕事がここまで生きてきた自分に対する誇りをくれました。他の職業と何ら変わりはありません。

国が意図して経済を止めたにも関わらず、特定の業種だけを支援除外するのはあまりにも不合理ではありませんか。政治には裁量があると言いますが、特定の人々を災害時に救わず絶望させ危険に迫りやることも裁量に含まれるのでしょうか。裁判所の役割は、道義観念に反しているなどと根拠もなく言って特定の人々を貶めることでしょうか。どうして人を救うことを恐れるのか。私たちが他の人と違うのでしょうか。差別は人を殺すとみんなが知っているのに、どうして差別をやめないのでしょうか。どうして人権を軽視するのでしょうか。私だけでなく多くの人がある答えを知りたがっています。

東日本大震災ではラブホテルに行列ができたそうです。そのラブホテルではお風呂に入ることができたからです。阪神大震災の際にはソーブランドが被災者にお風呂を貸し出したと聞きました。今年、静岡で断水が起こった時にもラブホテルが無料でお風呂を開放しました。多くの人によって救われました。全ての人に困難が降り注ぐ災害時に人々が助け合うことは、人間社会の根底に本来あるはずの道徳であり、持つべき道義なのではないでしょうか。私たちの社会はその認識を共有しているはずではないですか。

国会の議論では、性風俗事業者についてこれまで一貫して災害時の支援から外してきたから今回も除外するとも言っていました。差別とはそういうものなのだと思います。これまでの歴史の中でも当たり前だとか仕方がないと言われてきたもののなかに差別があったはずです。この社会は完璧ではありません。時に脆く不安定になりますし、間違いを犯します。だからこそあらゆる人々の権利を守るためのシステムがあり、それを実現する努力をしてきたはずです。裁判官の皆さんには、この社会で、誰もが安全に、絶望せずに生きていくために、どうか心ある判断をお願いしたいです。